

## 国語教育（読解指導）

甲斐 睦朗

### 1. はじめに

『表現研究』掲載の「国語教育（読解指導）」としては、文章表現に即した読解（指導）に的を絞ることになる。本稿ではそれ以外の条件は割愛する。

用語「読解」は、単純化すれば、大学入試の国語問題に解答するための読み解きの意味と、自ら問題を見出して資料などを参考にしてその解決策を得ようとする意味の2種に整理できる。

### 2. 読み解く意味の「読解」

用語「読解」は「文章を読み解く」意味であるが、その「文章」の概念にも幅があるし、「読み解く」行為にも広がりがある。平成10年の学習指導要領では長年使ってきた「読解」を「読むこと」に言い換えている。明治以前からの訓詁注釈の流れに加えて入試問題に影響されて、付与の文章の内容や論理などについて、設問に解答するかたちの受動的かつ精緻な読み取りの意味で用いられていた。それは通常の社会の言語生活、すなわち新聞や広報などの理解には直結しないし、幅広い読書とも関係がない。そこで、「読むこと」に言い換えることで、楽しんで読んだり、自らの問題意識を解決したりするための文章理解が期待されたのである。

### 3. PISAの読解力の調査の衝撃

ほぼ同時期にOECDによって15歳段階のPISAの読解力調査が実施されて、日本の言語教育の偏りと弱点等が明確になった。PISAの読解力調査には、問題文が日本語としてこなれていないとか設問

がなじまないなどという問題点がありはしたが、資料を駆使して解決に向かう読解力育成自体が稀薄であるし、現在も改善されたとは言いにくい。

### 4. 読解力向上の図書の出版

書店には、PISAの読解力向上を目指した図書文献が数多く配架されている。文献A『読解力を育てる一言語活動の充実をどう図るか』全国国語指導研究会 東洋館出版社 2011年8月

文献Aは「言語活動の充実」を図ることによって「読解力」の育成を目指す内容を具体的に提案している。多くの類書同様、用語「技術」や「工夫」がキーワードとして駆使されている。

### 5. これからの読み方指導

文献B『新提案 教材再研究 循環し発展する教材研究～子どもの読み・子どもの学びから始めよう～』澤本和子監修 国語教育実践理論研究会著 東洋館出版 2011年7月

文献Bは教材研究を①素材研究、②学習者研究、③指導研究に三分して、①素材研究に力を入れているところに特長がある。教師には容易に読めるという趣旨なのか、近年は「素材研究」が粗略にされている。教材が読めていない授業はどんなに「技術」や「工夫」を駆使しても悲惨である。文献Bは、新機軸は打ち出していないが、その意味で穏当である。今後まずは教科書教材の文章表現の解明に力を入れる必要がある。そこに、表現学会会員の協力が期待される。

（京都橘大学）